

顕彰状

日下田實氏は1930年6月27日、栃木県芳賀郡益子町（現）に生まれた。山に囲まれた焼き物のふるさと益子で少年期を過ごし、終戦直後の真岡中学校に学んだ。同校卒業後、1948年4月に早稲田大学専門部政治経済学科に入学、翌49年4月に早稲田大学第一政治経済学部自治行政学科1年に編入した。在学中は山岳部に所属し、北アルプス劔岳、穂高岳の積雪期登山を成功させるなど、当時の学生登山界をリードする登山家として活躍した。4年次の52年には代表委員主将を務めるとともに、早稲田大学南米アコンカグア登山隊（関根吉郎隊長以下6名）に隊員として参加し、53年1月、登頂を果たした。この遠征によって早稲田大学体育名誉賞を受賞している。海拔6962メートルの南米最高峰への登頂経験が、後のヒマラヤでの快挙に繋がることになった。

その後、日下田實氏は1954年に日本山岳会第2次マナスル登山隊への参加に続いて、56年にはマナスル世界初登頂に成功した第3次マナスル登山隊（楨有恒隊長）に隊員として参加し、同年5月11日、加藤喜一郎氏（慶応大学山岳部OB）と共に8163メートルの頂上に立ったのである。今西壽雄氏（京都大学山岳部OB）とギャルツェン・ノルブ氏（ネパール人隊員）が前々日の9日、登頂したことに続くものであった。12人の隊員中最年少だった。このマナスル世界初登頂は、エベレスト登頂（1953年、イギリス隊）など、ヒマラヤ・オリンピックといわれた当時の8000メートル峰登山の中でも特筆される成果で、一連の新聞報道や記録映画「マナスルに立つ」は国民を熱狂させ、若者、少年たちを勇気づけた。終戦から10年余、歴史的といってよい快挙だった。

マナスル登頂から帰国した後、氏は毎日新聞社に入社し、運動部記者として活躍した。また、1960年からは早稲田大学体育局講師として体育実技「山岳」を担当し、62年からは山岳部監督を務めて後進の育成に当たった。その後は郷里の栃木県に戻り、益子町教育委員会委員長、県教育委員会委員長、民事調停委員を歴任して郷土の振興に貢献した。また、(社団法人)日本山岳会の評議員、常任評議員などを務めて日本登山界の発展に寄与した。1996年、永年の民事調停委員としての貢献に対して最高裁判所長官表彰を受けた。2001年にはマナスル登頂、調停委員の功績、地方教育への貢献に対して勲5等双光旭日章が贈られた。さらに、2006年12月、ネパール登山協会に招かれてマナスル登頂50周年の式典に参加し、名誉顕彰を受けた。現在は日本山岳会栃木支部長を務めている。

ここに早稲田大学は、卓越した登山活動によって戦後の日本人に勇気を与えるとともに、山岳界で後進の育成に尽力した特筆すべき貢献、ならびに早稲田大学への永年にわたる多大な功績と献身に対して、日下田實氏を早稲田大学スポーツ功労者として表彰し、その名誉を永く讃えるものである。

2010年3月25日

早稲田大学